

徳島大学教養部紀要  
(人文・社会科学)  
第二十四巻 別刷  
1989

ニーベルンゲン悲劇の構図  
——ハゲネの役割——

石 川 栄 作

## ニーベルンゲン悲劇の構図

——ハゲネの役割——

石川 栄 作

### Hagenes Rollen in der Nibelungentragödie

Eisaku ISHIKAWA

#### Zusammenfassung

Hagene, dessen Blicke *swinde* (413, 4) und *eislich* (1734, 4) sind, spielt als der erste Vasall des burgundischen Königshauses im Nibelungenlied eine große Rolle. Hier möchten wir die Komposition der Nibelungentragödie schildern und damit die Eigenschaft des Werks klarmachen, indem wir die Rollen Hagenes im ganzen Nibelungenlied beobachten.

Hagene tritt im ersten Teil des Epos als ein erfahrener Ratgeber auf. Als sein Todfeind Sifrit in Worms ankommt, rät er dem König Gunther, den starken Recken möglichst zuvorkommend aufzunehmen. Der grimmige Hagene schmiedet nun schon Ränke gegen den unverletzbaren Sifrit, der den Nibelungenschatz besitzt. Im Sachsenkrieg wie bei der Werbungsfahrt nach Isenstein scheint er zwar seine führende Rolle zu verlieren. Der schlaue Hagene weiß aber zugunsten des Burgundenlands die große Kraft Sifrits zu benutzen. Mit dieser geschickten List Hagenes sich verwirklicht die Doppelheirat, die später Sifrits Tragödie verursacht.

Die fatale Todfeindschaft Sifrits und Hagenes wird endlich sichtbar, als die burgundische Königin Prünhilt von Sifrits Frau Kriemhilt beleidigt wird. Der finstere Intrigant Hagene, der schon längst nach dem Nibelungenschatz begehrt, schlägt die Ermordung Sifrits vor, greift dann zu einer List und ermordet schließlich seinen Gegner Sifrit. Der untreue Hagene raubt außerdem später der Witwe Sifrits den Nibelungenhort und senkt ihn in den Rhein. Die eigentliche Absicht Hagenes bestand in der Vernichtung der Macht Sifrits. So wird die Tragödie Sifrits von dem listigen Hagene verursacht.

Hagene erscheint im zweiten Teil des Epos zuerst als Warner und Mahner. Als der Hunnenkönig Etzel um Kriemhilt wirbt, warnt Hagene den König Gunther vor der Wiederverheiratung Kriemhilts. Er vermag aber im Gegensatz zur ersten Teil seinen Ratschlag nicht durchzusetzen. Kriemhilt entschließt sich, Etzel zu heiraten. Sie schmiedet nun Ränke gegen den Horträuber Hagene. Der zweite Teil ist Umkehr des ersten Teils.

Dieser Antagonismus Hagenes und Kriemhilts wird endlich verhängnisvoll, als Hagene sich trotz des eigenen Warnung vor Kriemhilts Einladung entschließt, nach dem Hunnenland abzureisen. Hagene ist nicht mehr Warner, sondern Angreifer. An der Donau ergibt er sich als *ein helflicher trôst* (1526, 2) der Burgunden. Am Hunnenhof entgegnet der unentwegte Held Hagene auf Kriemhilts provokative Gesten. Er repliziert jeweils so überlegen, daß die Provozierende selber die Provozierte ist. In all diesen Auseinandersetzungen, wo es um den Nibelungenhort geht, triumphiert der übermütig Trozende immer die Rächlerin. Die unbeugsame Kraft Hagenes beweist am stärksten die letzte Szene, wo er, wie erwartet, seinen Herrn Gunther töten läßt und in höchstgewahrter Ehre stirbt, ohne das Geheimnis des Hortes preiszugeben. So wird die Tragödie der Burgunden von dem heroischen Hagene verursacht.

Hagene ist also im ersten Teil als ein untreue Intrigant und im zweiten Teil als ein unentwegter Held geschildert. Diese Doppelgestalt beruht auf der Verschmelzung der Sifrit- und Burgundensage. Als

Kriemhilt vom Nibelungendichter zur zentralen Gestalt erhoben wurde, bedurfte es der zweiten Hauptgestalt Hagene. Dieser Antagonismus trägt zur Vereinheitlichung des Epos bei. In dieser Konfrontation spielt der Nibelungenschatz, der die Macht bedeutet, eine wichtige Rolle. Der Hort ist für die beiden zum Fetisch des Sieges geworden. Der Schatz ist aber für die Rächerin auch die Morgengabe des ersten Gatten. Ihr Beharren auf dem Hort, dem Symbol Sifrits, bedeutet ihre treue Liebe an den ersten Gatten. Im ganzen Nibelungenlied verschmelzen also das Macht-Motiv und das Liebe-Motiv. Die Eigenschaft des Werks besteht in der Verschmelzung der beiden Motive.

### 序

「ニーベルンゲンの歌」は求婚の旅と招待の旅を軸として前編と後編とが均整のとれた構成を有しており、その中でも重要な役割を演じているのが、前編ではジーフリトであり、後編ではリュエデゲールであるということは、すでに拙稿<sup>1)</sup>で述べたところであるが、全体の悲劇の構造にとってこの二人以上になくなくてはならない人物として挙げられねばならないのがハゲネであろう。このハゲネは、「古エッダ」や「ヴォルスンガ・サガ」<sup>2)</sup>あるいは「ティードレクス・サガ」とは異なって、「ニーベルンゲンの歌」ではブルゴント国第一の家臣として登場するが、しかし、その素性については、トロネゲの生まれ(9, 1; 1753, 2)で、父はアルドリアーン(1539, 2; 1753, 2)であるという以外、「ニーベルンゲンの歌」のテキストからは何も知ることはできない。このアルドリアーンという珍しい名称を伝承している「ティードレクス・サガ」の中にはヘグニ(ハゲネ)の出生に関する記述が見い出される<sup>3)</sup>が、それによるとヘグニは、ニフルンゲン国王アルドリアーンの妃と或る妖精との間に生まれた子供であり<sup>4)</sup>、幼少の頃からとても人間とは思えず、まるで妖怪のようで、身体は大きくて、不気味で、陰険な容貌をしていたとある。恐怖を起こさせるこのハゲネの風貌は「ニーベルンゲンの歌」の中にも伝えられていて、前編と後編で、しかもそれぞれグンテル王の旅で一行が目的地に着いた場面において見い出される。すなわち、前編でイースラントの国に到着したとき、プリュンヒルトの家臣がハゲネを見て語る言葉には、ハゲネは「逞しい体格をしてはいるが、しばしば荒々しい眼つきをする(von swinden sînen blicken)ので、恐怖を呼び起こさせ、心柄も険しい人間」(413)とある。後編でもまた、フン族の国に到着した場面で、ハゲネは「堂々たる<sup>な</sup>体軀であって、胸幅はひろく、その頭髮は灰色をまじえており、両脚は長く伸び、眼光は<sup>は</sup>炯々と光を放って(eislich sîn gesihene)いた」(1734)と詩人自身に

- 1) 拙稿：「ニーベルンゲンの歌」における悲劇の二重構造——ジーフリトとリュエデゲールの役割——徳島大学教養部紀要(人文・社会科学)第23巻1988年。
- 2) 「古エッダ」を散文に改めたものと言われる「ヴォルスンガ・サガ」においては、ホグニ(ハゲネ)はラインの南に王国を有していたグーキ王の子グンナル、グットルム及びグズルーンと兄弟であったことが明記されている。(菅原邦城訳・解説：ゲルマン北欧の英雄伝説——ヴォルスンガ・サガ——東海大学出版会1979年75頁、並びに谷口幸男訳：アイスランドサガ新潮社1979年569頁。)
- 3) Thule. Altnordische Dichtung und Prosa. 22. Band. Die Geschichte Thidreks von Bern S. 223-224.
- 4) ヘグニ(ハゲネ)は、従って、アルドリアーンの実子グンナル、ゲールノーツ、ギーゼルヘル及びグリムヒルトとは異父兄弟ということになる。

よっても語られている。前編と後編で対を成しつつ明白に語られているこのハゲネの荒々しい (swinde, 413, 3) 氷のように冷い (eislich, 1734, 4) 眼の表現は、いずれも恐怖をひき起こさずにはいない。このような不気味で恐ろしい風貌をもつハゲネが「ニーベルンゲンの歌」のあらすじの展開に並々ならぬ影響を与えていることは確かであり、この作品の最初の方でニーデルラントのジゲムント父王が息子のジーフリトに警告している言葉によれば、「ハゲネは思い上がって (mit übermüete)、無礼なこと (hóhverte) もしかねぬ男であり、ザンテンの人々の身に災い (leit) をかもす恐れがないとはいえぬ」(54) 存在なのである。ここですでにハゲネは前編ではジーフリトの殺害者として、従って後編ではクリエムヒルトの敵対者として位置づけられているわけであり、ニーベルンゲン悲劇の構図は、ほかならぬこのハゲネによって描かれていると言っても過言ではないであろう。そこで本稿では、このハゲネがあらすじの展開の中で果たしている役割を考察することによって、ニーベルンゲン悲劇の構図を描き出し、この作品の持つ特質を探り出すことにしたい。

## I. ジーフリト暗殺とハゲネ

### 1) 二つの求婚——進言者としてのハゲネ——

「ニーベルンゲンの歌」前編においては二つの求婚が語られており、のちのジーフリト悲劇はこの二つの求婚に起因するが、これらいずれの求婚においても重要な役割を演じているのが言うまでもなくトロネゲのハゲネである。ハゲネは、序でも少し触れた通り、この作品ではブルゴント国第一の家臣として登場し、常にグンテル王のそばに仕え、国王が最も頼みとする助言者<sup>5)</sup>であるが、心柄は険しい (grimme gemuot, 413, 4) 人物であって、その二つの求婚にも多大の影響を及ぼさずにはいないのである。まず作品の最初の方でジーフリトがクリエムヒルトのミンネを求めてウォルムスにやってきたときも、ハゲネは「諸々の国や、異境のことまで知っている」(82, 1) 知識豊かな武士としてグンテル王に呼び出され、到着の勇士ジーフリトの英雄譚について長々と語り (86-101)、彼を丁重に出迎えるようグンテル王に進言する (101) のであるが、その際ジーフリトについてハゲネが、ニーベルンゲン財宝のことと不死身の甲羅と化した肌のことを語ったのも決して意味のないことではないのである。財宝と不死身の肌はジーフリトの権力の大きさを意味し、ブルゴント国にとっては大きな脅威であるが、心柄の険しいハゲネは、ここでジーフリトと戦うのではなく、逆にそのジーフリトの権力を利用しようと企むのである。ここですでにジーフリトはハゲネの宿敵なのであり、ハゲネの丁重な歓迎の進言ほど陰険なものはないのである。

そのようなハゲネが早速ジーフリトの権力を利用することを企むのが、すぐあとに起こるザクセン戦争のときである。リウデガストとリウデゲールが攻めてくることを知ったゲールノートは

5) 「古エッダ」中の「シグルズの短い歌」の中にもグンナルはヘゲニを最も頼りにしていたということが明記されている。(谷口幸男訳：エッダ——古代北欧歌謡集 新潮社1973年156頁。)

積極的に戦いの姿勢を見せる (150) のに対して、ハゲネはジーフリトを利用すべく、国王に進言してこう言うのである。

Dô sprach von Tronege Hagene:      《daz endunket mich niht guot.  
Liudegast unt Liudegêr      die tragent übermuot.  
wir mugen uns niht besenden      in sô kurzen tagen.》  
sô sprach der küene recke,      《wan muget irz Sîvrîde sagen?》 (151)

トロネゲのハゲネは言った、「それはよろしくありません。  
リウデガストとリウデゲールはひどく自信をもっています。  
味方はそう短時日のうちに兵を集めるわけには参りません。」  
さらに勇士はいう、「何ゆえジーフリトに仰しゃらぬのです。」

ハゲネはジーフリトの力を利用しようとしていることが明らかであり、国王に良策を進言する者として現われているのである。このハゲネの進言によって、ジーフリトが援助することとなり、戦いが始まる。ハゲネは部隊長の役を受け持つが、ザクセン戦争の英雄はジーフリトただ一人である。ハゲネは進言者であるに過ぎない。なるほどハゲネはブルゴント国第一の家臣としての本来の指導的な役目をジーフリトに奪われてしまっている<sup>6)</sup> かに見えるが、しかし彼は逆にジーフリトの力を巧みに利用しているのであり、全てはハゲネの策略なのであると言えよう。

グンテル王がイースラントのプリュンヒルトに求婚することになったときも然りである。それを知ったハゲネは国王にこう進言する。

《Sô wil ich iu daz râten》,      sprach dô Hagene,  
《ir bittet Sîvrîde      mit iu ze tragene  
die vil starken swære,      daz ist nu mîn rât,  
sît im daz ist sô kûndec,      wie ez um Prûnhilde stât.》 (331)

「ではわしの意見を申しあげよう、」ハゲネが口を出した、  
「この困難な仕事には、ジーフリト殿にも、  
片肌ぬいでいただくようお頼みなさるのが上分別かと思ひます。  
プリュンヒルトの事はジーフリト殿がよく心得ておられるから。」

ジーフリトがニーベルンゲンの宝の中でも特に不思議な力を持つ「隠れ蓑」(97, 3; 336-8)を所有しているのみならず、イースラントのプリュンヒルトの事(330)及びその国への正しい航路を心得ている(378, 3)ということを知っているハゲネは、このイースラントへの求婚の旅でもジーフリトの力を利用しようとしているのである。否、それどころか、このハゲネの進言はグンテル王の求婚を実現させるのみならず、同時にジーフリトとクリエムヒルトとの結婚をも実現さ

6) Marianne Wahl ARMSTRONG: Rolle und Charakter—Studien zur Menschendarstellung im Nibelungenlied. Kümmerle Verlag 1979. S. 151.

せようと積極的に働きかけてもいるのである。国王グンテルが旅立ちにあたって立派な衣裳の準備を母后ウオテに依頼しかけようとする、ハゲネは国王に次のように進言することからもそれは明らかである。

Dô sprach von Tronege Hagene mit hêrlîchen siten:  
 «waz welt ir iuwer muoter sölher dienste biten?  
 lât iuwer swester hoeren, wes ir habet muot:  
 sô wîrdet iu ir dienest zuo dirre hovereise guot.» (346)

そのときトロネゲのハゲネが居ずまいを正して口を開いた、  
 「このような仕事を、なにゆえ母君になどお願いなされますか。  
 御意のほどは妹君にお聞かせなさいませ。  
 あの方のお心尽くしこそ今度の訪れの旅には役立つでしょう。」

イースラントへ旅立つ際だけではなく、イースラントで勝利を収めて帰還する途中でも、ジーフリトをクリエムヒルトに結びつけようとするハゲネの努力がうかがえる。トロネゲのハゲネは、すなわち、ジーフリトを使者として派遣することを国王に進言するのである。

«Nu bitet Sîfride fûeren die boteschaft;  
 der kan si wol gewerben mit ellenthafter kraft.  
 versage er iu die reise, ir sult mit guoten siten  
 durch iuwer swester liebe der bete in vriuntlichen biten.» (532)

「使者の役を果たすことは、ジーフリト殿におたのみ下さい。  
 あの方なら申しぶんなく、やってのけられましょう。  
 もしも使いの旅を拒まれるようだったら、おん妹君のため、  
 友情をもってねんごろにお頼みになるようお願い申します。」

ハゲネはジーフリトをクリエムヒルトと結ばせようとしていることがこの言葉からも明らかであり、あらすじはこうして全てハゲネの進言によって、グンテルとプリュンヒルトとの結婚のみならず、ジーフリトとクリエムヒルトとの結婚が実現される結果となるのである。「ニーベルンゲンの歌」前編における二つの結婚は知識豊かなハゲネの進言によるものであると言っても過言ではないであろう。

このようにハゲネの進言はことごとくあらすじを大きく展開させることにつながっているのであるが、ハゲネは、すでに指摘したように、心柄の険しい者である限り、国王への進言には常に何か企みが隠されていることは容易に読み取ることができよう。ジーフリトを味方に引き入れクリエムヒルトに結びつけたのも、究極的にはブルゴント国を護り繁栄させるためであり、不死身のジーフリトは、ハゲネからすれば、ブルゴント国繁栄のために利用されたに過ぎないのである。不死身のジーフリトと心柄の険しいハゲネとが和合することが決してありえないということは、結婚式のあとジーフリト夫妻がニーデルラントの国へ帰国するにあたって、クリエムヒルトがハ

ゲネを家来に加えることを口にする、ハゲネは顔色を変えて断固としてこう答えることから明らかである。

do gewan dar umbe Hagene ein zornlichez leben;  
er sprach: «jane mac uns Gunther ze werlde niemen gegeben. (698, 3-4)

Ander iuwer gesinde lât iu volgen mite,  
want ir doch wol bekennet der Tronegære site:  
wir müezen bî den künigen hie en hove bestân.  
wir suln in langer dienen, den wir alher gevolget hân.» (699)

ハゲネはそのため<sup>ふつぜん</sup>怫然色をなして答えた、  
「グンテル様は私どもをこの世の誰にもお譲りにはなれませぬ。

あなた様の、ほかのご家来をお連れなさいませ。  
トロネゲ出身のものの気風は、よくご存じのはずでございます。  
私どもはこの宮廷の王様たちのもとに留まらねばなりません。  
これまでお仕えた方に今後もお仕えいたすのです。」

ここで不死身のジーフリトと心柄の険しいハゲネとの対立がかすかに表面化し始めているのであり、両者は最初から宿命的な対立関係にあったことは明白である。従って、ハゲネの国王への進言はジーフリトを味方に入れようとするものであるというよりはむしろ、上で述べたように、ジーフリトの権力を逆に利用しようとするものなのであり、ハゲネはこの二つの結婚の実現に際しては彼の豊かな知識に基づいてその都度常にイニシアティブを取っていると言うことができるのである。

## 2) 招待の旅——陰謀家としてのハゲネ——

ジーフリトとハゲネとのこの宿命的な対立は、十年後、グンテル王とプリュンヒルトとがジーフリト夫妻を饗宴に招待したことから徐々に表面化してゆく。その対立を助長するのが、ニーベルンゲン財宝に対するハゲネの欲望である。ハゲネがジーフリトの権力をねたみ、ニーベルンゲンの黄金に以前から目をつけていたということは、ジーフリト夫妻を饗宴に招待した際、ハゲネが口にした言葉からも明白である。

«Er mac», sprach dô Hagene, «von im sampfte geben.  
er'n kundez niht verswenden, unt sold er immer leben.  
hort der Nibelunge beslozen hât sîn hant.  
hey sold er komen immer in der Burgonden lant!» (774)

「あの方は、」ハゲネがいった、「それくらいのを<sup>みとこ</sup>懐ろから出すのは容易なことです。永久に生き<sup>ながら</sup>存えても財産を使いきれはしません。何しろニーベルンゲンの宝をもっているのです。

あの宝がブルゴントに来たらいいのだが。」

ハゲネがジーフリトをクリエムヒルトに結びつけた動機は、なるほど「ニーベルンゲンの歌」のテキストにはどこにも記されていないが、しかし、この引用詩節から考えてみるに、その動機の一つとしてニーベルンゲン財宝へのハゲネの飽くなき欲望を挙げてもよいのではないか。結婚によって得た信頼関係をうまく利用して、ハゲネはニーベルンゲンの財宝を奪い取ろうとしていると考えることもできるからである。事実、権力の象徴であるこのニーベルンゲンの黄金こそ、ジーフリトとハゲネとの対立の根源であり、のちのニーベルンゲン悲劇の芽でもある。ハゲネの行動するところ、常にこの黄金が関与しており、その財宝強奪をめざして巧みな策略を企ててゆくのであり、その企て実行の格好のきっかけがクリエムヒルトによるプリュンヒルトの恥辱である。クリエムヒルトから罵言を受けたプリュンヒルトはあまりに打ちしおれていたため、ハゲネは王妃のところへ伺候して、子細を尋ねる。王妃から子細を聞いたハゲネは即座に「それは、クリエムヒルトの夫が償わねばならない」(864, 3) と誓って、ジーフリトの命をとろうと謀る(865, 1) ののである。その話を聞いたギーゼルヘルは真心からそれをやめるよう忠告する(866) が、それに対してハゲネはこう言う。

《Suln wir gouche ziehen?》 sprach aber Hagene:  
 《des habent lützel êre sô guote degene.  
 daz er sich hât gerüemet der lieben vrouwen mîn,  
 dar umbe wil ich sterben, ez engê im an daz leben sîn.》 (867)

「私たちは私生児を長く養っておくべきでしょうか、」  
 ハゲネが言い返した、「それは立派な武士の名誉ではありません。  
 お妃様の一件を自慢話にしたとあっては、  
 あの人の命をもらうか、さもなくば自分で死んでしまいます。」

「古エッダ」と「ヴォルスンガ・サガ」ではグンナルが黄金と全ての権力を欲しいままにできるのだと言って、シグルズを亡き者にしようと企み、ホグニがそれを諫止している<sup>7)</sup> のであるが、「ニーベルンゲンの歌」ではその逆である。ハゲネは始終グンテル王を唆し、もしジーフリトが亡いものとなれば、あまたの国々が王の領土となるであろうと説いた(870, 2-3) のである。ジーフリトとグンテル王の二人の求婚の際にはウォルムスの繁栄のために良策を進言するだけの家臣であったハゲネは、ここに至ってはウォルムスの権勢を拡大するための陰謀家として国王を唆す者となっているのであり、ハゲネの心柄がだんだんと陰しくなっていることが明らかである。恐ろしくて強い(872, 3) ジーフリトを相手にしては誰も手足がでまいと言うグンテル王に向かって、ハゲネは知恵ある陰謀家として自信たっぷりにこう言うのである。

7) 谷口幸男訳：エッダ 156頁、菅原邦城訳・解説：ゲルマン北欧の英雄伝説 104—105頁、並びに谷口幸男訳：アイスランドサガ582頁参照。



《Nein er》， sprach dô Hagene.      《ir muget wol stille dagen.  
ich getrûwez heinliche      alsô wol an getragen:  
daz Prûnhilde weinen      sol im werden leit.  
jâ sol im von Hagenen      immer wesen widerseit.》 (873)

「その心配はございません、」ハゲネがいった、  
「王様は何も仰しゃらずと結構です。私が密かにうまく工夫をしますから。  
プリュンヒルト様のお嘆きをあの男に思い知らせてやりましょう。  
ハゲネは永久にあの男を敵といたします。」

プリュンヒルトの恥辱がきっかけとなって、ジーフリトとハゲネとの敵対関係が今やはっきりと表面に現われたのである。心柄の険しいハゲネは策略を用いずにはいない。巧みな策略 (874-875) をグンテル王に説明したあと、ハゲネはグンテル王にまずジーフリトから戦いの援助の約束を手に入れさせる (884-6)。次にハゲネはクリエムヒルトの座所に伺候して、一同が出陣する旨を告げ、暇乞いをする (891, 3-4) とき、夫のことを心配するクリエムヒルトの心をうまくとらえてジーフリトの弱点を聞き出す (899-902) のである。ジーフリトの秘密を知ったハゲネはさらに、一族が戦場に立った時、ジーフリトのどこを護ればよいかかわかるように、ジーフリトの衣裳の上に小さな印を縫いつけておくよう依頼する (903, 1-3)。詩人も語っているように、クリエムヒルトは夫の<sup>つつが</sup>恙なきを願ったのに、それが命を縮める (903, 4) こととなったのである。詩人はさらにこの場面をこう語っている。

dô wând' ouch des diu vrouwe,      ez sold' im vrume sîn:  
dô was dâ mite verrâten      der Kriemhilde man.  
urloup nam dô Hagene,      dô gie er vrceliche dan. (905, 2-4)

Des küniges ingesinde      was allez wol genuot.  
ich wæne immer recke      deheiner mêt getuot  
sô grôzer meinræte,      sô dâ von im ergie,  
dô sich an sîne triuwe      Kriemhilt diu küneginne lie. (906)

妃はこれが夫の身に役立つことと思ったのだが、  
あに計らんやクリエムヒルトの夫は、これに乗せられたのである。  
ハゲネは暇乞いを告げて、北<sup>ほくそえ</sup>叟笑みつつ退出した。

国王の郎党はいずれも晴れやかな様子であった。  
だが思うに、ハゲネがなしたような恐ろしい裏切りは、  
他のいかなる武士も敢えてしないところであろう。  
王妃クリエムヒルトは、彼の誠実に信頼したことなのだから。

ジーフリトとクリエムヒルトとの信頼関係を逆手にとって、恐ろしい裏切り行為を行なうハゲネは、巧みな策略家であったことが明白である。巧みな陰謀家ハゲネの秘策はもちろんとどまると

ころなく、戦いが中止になって、グンテル王がワスケンの森へ熊や猪の狩りに出かけようと提案した (911, 1-3) ときもなお続くが、これも、テキストから明らかのように、「あの不実きわまる男、ハゲネの企みによる」(911, 4) ものだったのである。ハゲネはまず飲み物を戦略的に持って出かけるのを忘れて (967)、冷たい泉の湧いているところへ行くことを提案する (969, 1-3)。この泉への提案はハゲネにとってはなくてはならないものである。ジーフリトが背を見せるのを槍で突き刺す以外には、不死身のジーフリトを殺害する方法はなかったからである。戦略通り、ハゲネはジーフリトが泉の上にかがんで水を飲んでいるところを、あの十字めがけて、槍で突き刺す (980-981) のである。細かな点に至るまで前もって計算されたハゲネの用意周到な策略によって、不死身の英雄ジーフリトもついには滅んでゆかなければならない結果となったのであるが、このような策略を弄したハゲネの本来の意図は、ジーフリトに致命傷を負わせたあとにハゲネ自身が口にする言葉からも明らかである。

Dô sprach der grimme Hagene:      «jane weiz ich, waz ir kleit.  
ez hât nu allez ende      unser sorge unt unser leit.  
wir vinden ir vil wênic,      die getürren uns bestân.  
wol mich, deich sîner hêrschaft      hân ze râte getân.» (993)

<sup>どうもう</sup>  
獯猛なるハゲネがいった、「なぜお嘆きになるのか分かりません。  
我々の心配も悩みも、これですっかり片づきました。  
我々に楯つくような人間はもういなくなりました。  
この男の権勢を挫くじいてしまってよかったと思っているのです。」

ジーフリトの存在はブルゴント国にとっては心配であり悩み (993, 2) であったのであり、ハゲネはウォルムスを護るために不死身の英雄ジーフリトを殺害したのである。このハゲネの言葉は、権力のモチーフは「ニーベルンゲンの歌」ではすっかり削除されたというわけではなく、決定的な箇所では時代錯誤の残物として保持されたままであるということを示している<sup>8)</sup>のである。

ハゲネがプリュンヒルトの恥辱の復讐だけのためにジーフリトを殺害したのではなく、本質的なところでは彼にとって財宝に関わる権力が重要であったということは、さらにジーフリト暗殺後3年目に、ウォルムスを護るためだけでなく、拡大をはかるために、ジーフリトの黄金に目をつけて、グンテル王にクリエムヒルトと和解することを進言することからも明らかである。

Dô sprach der helt von Tronege:      «möht ir daz tragen an,  
daz ir iuwer swester      ze vriunde möhtet hân,  
sô koeme ze disen landen      daz Nibelunges golt.  
des möht ir vil gewinnen,      würd' uns diu küneginne holt.» (1107)

ある時トロネゲのハゲネがいった、「お妹御様と

8) M. W. ARMSTRONG: a. a. O., S. 152-153.

仲直りをなさるような手だてはございませんか。  
もしそうになったら、ニーベルンゲンの黄金がこの国へ参ります。  
王妃が我々の味方になれば、あなたは大したお金持になられますが。」

ハゲネ本来の企みはニーベルンゲンの黄金にあったのであり、ハゲネの行動には常に財宝が関与していたことが明らかである。和解ののち、王妃クリエムヒルトが人々の勧めに従い、おびたらしい宝物をニーベルンゲンの国からとりよせて、ラインの畔へはこぼせた (1116) とき、詩人も語っているように、ハゲネがこれに欲を出したのも、まったく無理のないことであった (1123, 4) のである。ニーベルンゲンの財宝の中でも黄金づくりの小杖の性能を知り得たものは、この世の何者をも征服することができるのである (1124, 1-3) とも語られている。財宝は権力の象徴なのである。貧しきものにも富めるものにもクリエムヒルトが財宝を施し与えているのを見たハゲネは、だからグンテル王に進言してこう言うのである。

Hagen sprach ze dem künige:      《ez solde ein frumer man  
deheinem einem wibe      niht des hordes lân.  
si bringet ez mit gâbe      noch unz ûf den tac,  
dâ'z vil wol geriuwen      die küenen Burgonden mac.》 (1130)

ハゲネが王にいった、「有能な男ならば、  
女などに財宝を委ねてはおかないでしょう。  
あの方は施しによって、とどのつまり  
勇敢なブルゴント人を後悔させるようなことを仕出かされるでしょう。」

国王グンテルは、クリエムヒルトとの和解の誓言を持ち出したものの、ハゲネの巧みな進言によって唆され、結局ハゲネがクリエムヒルトからおびたらしい宝物をとりあげ、全ての鍵を預かってしまうこととなった (1132) のである。さらにハゲネは、国王たちの留守中に、そのおびたらしい財宝をとりあげて全てローヒェにおいてライン河に沈めてしまった (1137) のである。クリエムヒルトは、この時ほど彼を憎んだことはなかった (1139, 4) と詩人も語っている。かくて夫の死と、彼らから宝を全部とられたこととで、彼女の心は新たな悩みのためにいとど重くなった (1141, 1-2) が、この彼女の新たな悩み (leit) のために、のちにはより大きな災いをもたらされることとなるのである。「ニーベルンゲンの歌」におけるハゲネは、こうして自らの企てを詳細に至るまで正確に前もって計算し、巧みな策略でもって企てを実行してゆく、もっぱら陰険で不実な男として描かれているのであり、ともかくも「ニーベルンゲンの歌」前編の悲劇の構図は、こうしてジーフリトの財宝強奪を企む陰謀家ハゲネによって描かれていると言ってもよいであろう。

## II. ブルゴント族滅亡とハゲネ

## 1) エッツェル王の求婚——警告者としてのハゲネ——

前編でのあらすじが二つの求婚によって動き始めたように、後編でもあらすじはエッツェル王の求婚によって動き始めるが、ここでも重要な役割を演じているのがハゲネである。ハゲネは前編と同じく後編でも広い知識を持った人物として登場している。リュエデゲールがエッツェル王の使者としてウォルムスにやって来たときも、ハゲネは知識豊かな武士としてグンテル王に呼び出されて (1177, 4)、到着の使者はフン国の位高く勇猛なる武士リュエデゲールである (1180; 1181, 4) ことをグンテル王に伝えるのである。前編と同じように、ここでも客人はウォルムスでうやうやしく出迎えられ (1183, 4)、前編と対を成しているとも言えるわけであるが、しかし、前編のあらすじはハゲネの思い通りに展開していたのに対して、後編になると反対にハゲネの意志に反したことが起こる。ハゲネは使者リュエデゲールがもたらしたエッツェル王の求婚に反対するのである。

Si rietenz al gemeine;      niuwan Hagene  
der sprach ze Gunther      dem küenen degene:  
«habt ir rehte sinne,      sô wirt ez wol behuot,  
ob sis joch volgen wolde,      daz irz nimmer getuot.» (1203)

彼らは異口同音に賛同したが、ただハゲネ一人だけが  
勇士グンテルにむかっていった、「正しい分別をおもちならば、  
十分にご用心なされて、よしんばお妹君がご承知遊ばされようとも、  
お見合わせになるほうがよろしいと存じます。」

知識と経験豊かなハゲネはただちにブルゴント国の危険を感じたのである。クリエムヒルトにとって幸いとなることなら、エッツェル王の求婚に応じてよい (1204) と考えるグンテル王に向かって、ハゲネは繰り返してこう警告する。

Dô sprach aber Hagene:      «nu lâit die rede stân.  
het ir Etzeln künde,      als ich sîn künde hân:  
sol si in danne minnen,      als ich iuch hœere jehen,  
sô ist iu aller êrste      von schulden sorgen geschehen.» (1205)

しかし重ねてハゲネがいった、「その話は<sup>お</sup>措きなさいまし。  
あなたが私と同様エッツェルのことをよくご存じであったら、  
そしてそれなのに私が承る通りお妃様があの王と結婚なされたら、  
まずもってあなたにきつと悩みが生じましょう。」

前編のハゲネを進言者とすれば、後編の彼は警告者ということになろう。前編ではことごとくグンテル王に進言していたハゲネは、後編に至るとことごとくグンテル王に警告を發し反対するの

である。数々の苦しみ (leide, 1208, 3; 1209, 1) を与えたクリエムヒルトにこれからでも誠を尽くして、その苦しみの贖いをするがよい (1208-9) と主張するギーゼルヘルに向かっても、ハゲネはこう警告する。

«Daz ich dâ wol bekenne, daz tuon ich iu kunt.  
sol si nemen Etsel, gelebt si an die stunt,  
si getuot uns noch vil leide, swie siz getraget an.  
jâ wirt ir dienende vil manic wætflicher man.» (1210)

「私によくわかっていることを申し上げます。もしもお妃様がエツェルに嫁がれることになり、それまでご存生になったら、きっと我々にできる限りの苦難をお与えになりましょう。多くの颯爽たる武士が仕えるでしょうから。」

ギーゼルヘルと同様のこと (1211) を主張するゲールノートに対しても、ハゲネは再度同様の警告をするのである。

Dô sprach aber Hagene: «mir mac niemen widersagen.  
und sol diu edele Kriemhilt Helchen krone tragen,  
si getuot uns leide, swie si gefüege daz.  
ir sult iz lân beliben, daz zimt iu recken michel baz.» (1212)

ハゲネはまたもいった、「私の申すことはどなたも  
否むことができますまい。クリエムヒルト様がヘルヒェの王冠を  
戴かれたら、何とか企らんで我々に悩みを与えられましょう。  
お取りやめになるほうが、貴いお武家方に相応しいことです。」

ハゲネの警告は、国王兄弟三人にそれぞれ同様の警告をすることによって、執拗なほどに強められているとも言える。ハゲネは前編では積極的にクリエムヒルトをジーフリトに結びつけようと努めたのに対して、後編ではクリエムヒルトがエツェル王に結びつくことに強く反対するのである。前編と後編とが著しいコントラストを成していることが明らかである。前編で自分の思い通りに事を運んだハゲネは、今度ばかりは、国王兄弟とも意見で対立することとなり、結局のところクリエムヒルトの再婚は本人の意志に委ねられることとなる (1214) のである。

ハゲネの警告は、畢竟、ジーフリトがクリエムヒルトに遺した財宝に基づいている。ハゲネがクリエムヒルトから奪い取ってライン河に沈めたとは言うものの、妃は今なお百頭の駄馬をもつてしても運びきれぬほどのニーベルンゲンの国の黄金をもっていた (1271, 1-2) のである。その財宝でもって多くの家来を召しかかえ、ジーフリトの復讐を実行しないではないことをハゲネは確信していたのであり、ニーベルンゲン財宝は今なおハゲネにとっては脅威であったのである。ジーフリトとハゲネとの宿命的な対立はジーフリト死後も続いているわけであり、この意

味でクリエムヒルトはジーフリトの真の後継者であると言えよう。後編におけるクリエムヒルトとハゲネとの対立は、根本的にはジーフリトとハゲネとの対立にほかならない。ハゲネの意識の中にはジーフリトが今なお財宝という形で生き続けているのである。躊躇していたクリエムヒルトがついにエツェル王との結婚を決意して、ジーフリトの遺した財宝をフン族の国へもって行って、手ずから分かち与えようとしている噂がハゲネの耳に聞こえたときも、ハゲネはこう警告するのである。

Er sprach: «sît mir vrou Kriemhilt nimmer wirdet holt,  
sô muoz ouch hie belîben daz Sîfrides golt.  
zwiu sold' ich mînen finden lân sô michel guot?  
ich weiz vil wol, waz Kriemhilt mit disem schatze getuot. (1272)

Ob si in bræhte hinnen, ich wil gelouben daz,  
er wurde doch zerteilet ûf den mînen haz.  
si'n habent ouch niht der rosse, diu in solden tragen.  
in wil behalten Hagene, daz sol man Kriemhilde sagen.» (1273)

彼はいった、「クリエムヒルト殿がわしに決して好意を抱かれぬ以上、  
ジーフリトの宝はここに留めておかねばならぬ。  
あれほど大きな宝をどうして敵の手に委ねられよう。  
クリエムヒルト殿があつた宝で何をするかはわかっているのだ。

あの方がここから宝を持ち出したら、  
わしに対する憎しみをあおるためにバラ撒かれるに違いないのだ。  
あの人たちには運搬に必要なだけの馬の用意がないのだから、  
宝はハゲネが預かっておくと、クリエムヒルト殿に申すがよい。」

この赴きを聞いて、クリエムヒルトはひどく胸を痛め (1274, 1)、まさにこの財宝ゆえに、ここでハゲネとクリエムヒルトとの対立が表面化し決定的となったのである。黄金に執着するクリエムヒルトに向かって、リュエデゲールはエツェル王の沢山の黄金を保証するのであるが、それに対してクリエムヒルトはこう言う。

Dô sprach diu kûneginne: «vil edel Rûedegêr,  
ez gewan kûniges tochter nie rîcheite mêr,  
danne der mich Hagene âne hât getân.» (1276, 1-3)

すると妃はいった、「気高いリュエデゲールよ、  
ハゲネが私から奪った財宝ほどおびただしい富は、  
いかなる王女もかつて手に入れたことのないものです。」

クリエムヒルトにとって重要なのはジーフリトが遺したニーベルンゲンの黄金なのであり、それを奪い取ったハゲネとクリエムヒルトとの対立はもはや避けがたい運命へと深まっていったので

ある。ここでも財宝が重要な役割を演じていることがうなづけよう。前編ではこの財宝への飽くなき欲望からハゲネが巧みな策略によってクリエムヒルトをあざむいていったのであるが、後編では逆にこれからクリエムヒルトがその財宝返還を求めてハゲネに陰謀を企ててゆくのである。全くの裏返しであり、この点でも前編と後編とが著しいコントラストを成していることが明らかである。

## 2) 招待の旅——英雄としてのハゲネ——

ハゲネとクリエムヒルトとの対立は、それから13年後クリエムヒルトがブルゴント族をフン族の国へと招待したとき、さらに深められることになる。まず使者がブルゴントの国ウォルムスに到着したときも、ハゲネは知識豊かな武士として使者がエッツェル王のヴァイオリン弾きであることを報告し(1432)、ハゲネは丁重に出迎えることを進言するが、その使者がもたらした招待の話については猛烈に反対するのである。

Daz er wol möhte rîten in Etzelen lant,  
daz rieten im die besten, die er dar under vant,  
âne Hagen eine. dem was ez grimme leit.  
er sprach zem künige tougen: «ir habt iu selben widerseit. (1458)

Nu ist iu doch gewizzen, waz wir haben getân.  
wir mugen immer sorge zuo Kriemhilde hân,  
wand ich sluoc ze tôde ir man mit mîner hant.  
wie getorste wir gerîten in daz Etzelen lant?» (1459)

国王は当然エッツェルの国に赴かれるがよいと、そこに居合わせた主だった人々はそう勧めたが、ただハゲネ一人だけはひどくそれを厭がり、ひそかに国王にいった、「それはあなたご自身に戦いを挑むというもの。

我々が何をしたかは、あなたは篤とご承知のことです。  
我々はいつ何どきでもクリエムヒルト殿を警戒せねばなりません。  
私があの方の夫を手にかけて殺したのですから。  
どうしてのこのこエッツェルの国へなど行けましょう。」

クリエムヒルトとの和解を持ち出して、彼女が恨みを捨て、ブルゴント族のかつての所業をゆるしたのだ(1460)と主張するグンテル王に向かって、またもやハゲネは警告してこう言うのである。

«Nu lâit iuch niht betriegen», sprach Hagene, «swes si jehen,  
die boten von den Hiunen. welt ir Kriemhilde sehen,  
ir muget dâ wol verliesen die êre und ouch den lip:

jâ ist vil lancræche des künece Etezelen wîp.》 (1461)

「フン族の使者がなんと申そうと、」ハゲネがいった、  
「だまされてはなりません。もしクリエムヒルト殿にお会いになったら、  
あなたの名誉もお命もないものとなりましょう。  
エツェル王の妃は、なかなか執念ぶかいお方ですから。」

このハゲネの警告は、13年前のエツェル王求婚のときと対を成しているとも言えるわけであるが、しかし、今回はゲールノートとギーゼルヘルから侮辱的な言葉 (1462-3) を受けるや否や、ハゲネの態度は警告者から逆に攻撃者へと変身する。前編ではプリュンヒルトの恥辱によってハゲネは単なる進言者から不実な殺害者へと変身したのであるが、後編では自らの侮辱によって警告者から逆に攻撃者へと変身するのである。

Dô begonde zürnen von Tronege der degen:  
《ine wil, daz ir iemen füeret uf den wegen,  
der getürre rîten mit iu ze hove baz.  
sît ir niht welt erwinden, ich sol iu wol erzeigen daz.》 (1464)

するとトロネゲの勇士は<sup>ふつぜん</sup>佛然として怒った、  
「私以上にフン族の宮廷へゆく勇気のあるものを、  
旅路にお連れになることなどはあり得ません。どうしても  
おやめにならないからには、私の勇気のほどをお目にかけましょう。」

招待の旅には容易ならぬ陰謀が隠されていることを知りながらも、武士としての名誉を重んずるハゲネは、それを避けることはできず、ついに招待の旅へと出かけてゆく決心をするのである。今や警告者としての役割はルーモルトが演じ、ハゲネは対照的に戦闘の準備をする。ハゲネは今や本来の勇猛な武士となったのであり、夢などにも惑わされることもない。ウオテから不吉な夢を聞いたときも、こう言う。

《Swer sich an troume wendet》, sprach dô Hagene,  
《der enweiz der rechten mære niht ze sagene,  
wenn' ez im ze êren volleclichen stê.  
ich wil, daz mîn herre ze hove nâch urloube gê. (1510)

Wir suln gerne rîten in Etezelen lant.  
dâ mac wol dienen künege guoter helde hant,  
dâ wir dâ schouwen müezen Kriemhilde hôhgezît.》 (1511, 1-3)

「夢などを信じる人は、」そのときハゲネがいった、  
「自分の誉れが申しぶんなく広まっているのに、  
分別を失って迷ってばかりいる者なのです。わが主君には、  
ご婦人たちのところに参られて<sup>いとまご</sup>暇乞いをなさるようお勧め申したい。」



私どもは勇んでエッツェルの国に参りましょう。  
そしてクリエムヒルト殿にまのあたり接する折には、  
勇ましい武士たちが王様がたのお役に立つでしょう。」

ハゲネは恐怖のためには左右されはしない (1513, 1) ことを明らかにして、フン族の国へと旅立つのであるが、今やハゲネが恐怖を恐れぬ真に勇敢な武士であることを最もよく明示するのが、ドーナウ河渡河の場面であろう。河水はみなぎりあふれ、流れも極めて速かったので、一行は渡ることができない。ハゲネは渡し守を捜しながら、岸辺をあちこち歩いていると、水の乙女に出会い不吉な予言を受ける。すなわち、「王室の司祭以外は誰も生きて帰れない」(1542) という不吉な予言を聞いたハゲネは、渡河の際、司祭を河に投げ落とすのであるが、司祭が神の御手に救われて無事にまた元の岸へかえり着くを見て、水の乙女たちの占いが避けがたい運命であることを悟ると、ハゲネは船を打ちくたいて流れに投じてしまったのである。フン族の国からラインへ帰る際にどうして河を渡るのかというダンクワルトの質問に対して、二度とそういうことはあるまいと答えて、さらにこう語るのである。

Dô sprach der helt von Tronege:      «ich tuon iz uf den wân:  
ob wir an dirre reise      deheinen zagen hân,  
der uns entrinnen welle      durch zâgeliche nôt,  
der muoz an disem wâge      doch liden schamelichen tôt.» (1583)

トロネゲの勇士はなお語った、「我々の今度の旅路で、  
臆病気を出して逃げてかえるような卑怯者があった場合、  
そういう徒輩はこの河でみじめな死を  
遂げる方がよいと思うので、こうやっておくのだ。」

ハゲネはここで自ら模範的にゲルマン武士の堅固な反抗精神を示すことによって、一行の武士たちに勇気を奮い立たせているのである。まさにこの英雄精神のためにフォルケールはハゲネを心から尊敬するようになる (1584) ほどであり、このハゲネこそブルゴント族を支える英雄であると言えよう。このドーナウ河渡河の場面を語るに先立って、ニーベルンゲンの詩人もハゲネのことをニーベルンゲン族にとっては「杖とも柱とも頼む人間」(ein helfficher trôst, 1526, 2) であったと語っている。この trôst の本来の意味は「信頼、信用」(Zuversicht, Vertrauen) であり<sup>9)</sup>、ここでハゲネがその古代ゲルマン的英雄精神のために称えられていることは確かである。ここでは巧みに策略を弄する前編の不実なハゲネというイメージはない。むしろ反対に、ハゲネは今や運命を恐れることもなく堂々と破滅へと突き進む勇猛果敢な英雄なのである。

9) この trôst については Gottfried WEBER: Das Nibelungenlied — Problem und Idee — J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung 1963. S. 242-244. を参照のこと。

ベッヒェラーレンの国<sup>10)</sup>を経てフン族の国に到着したときも、ハゲネの姿はフン族のあまたの勇士にとっては堂々たる英雄として映る。ハゲネは、あらゆる武士にまさって剛勇なクリエムヒルトの夫、ニーデルラントのジーフリトを討った男と取沙汰されていたので、そのトロネゲのハゲネとは一体いかなる人物であろうかと、フン族の宮廷では並々ならぬ騒ぎであった(1733)と詩人によっても語られている。ジーフリト殺害行為は、今や奇妙にもフン族の勇士にはもはや道徳的汚点としてあてはまるのではなく、むしろ英雄的行為としてあてはまっている<sup>11)</sup>のである。

偽りの心を抱きながらニーベルンゲンの人々を出迎えた(1737, 2)クリエムヒルトに直面したときも、ハゲネは英雄として自信たっぷり、クリエムヒルトの挑発的な態度に反応するのである。ニーベルンゲンの宝はどこへやったか(1741)という質問に対して、ハゲネは答える。

«Entriuwen, mîn vrou Kriemhilt, des ist vil manec tac,  
daz ich hort der Nibelunge niene gepflac.  
den hiezen mîne herren senken in den Rîn,  
dâ muoz er wærlîche unz an daz jungeste sîn.» (1742)

...

«Jâ bringe ich iu den tiuvel», sprach aber Hagene.  
«ich hân an mînem schilde sô vil ze tragene  
und an der mînen brünne; mîn helm der ist lieht.  
daz swert an mîner hende des enbringe ich iu nieht.» (1744)

「王妃クリエムヒルト様、私がニーベルンゲンの宝を手放してから、事実ながい年月がたっておるのです。主君がたはあれをライン河に沈めよとご命令になりました。宝は、まことに世界の末日まで河底にあるに違いありません。」

...

「私はあなたに何一つ持参しておりません、ハゲネが重ねていった、「私は楯やら鎧やら、また輝く兜やら手に持っている剣やらで、持物は沢山ありますが、いずれもあなたに差しあげるものではございませぬ。」

ハゲネはこれらの言葉でもって戦う意志をほのめかせているのであり、堂々とクリエムヒルトの挑発的な態度に反抗しているのである。ハゲネはその都度慎重に答えているので、挑発しているク

10) 辺境伯リュエデゲールの国であるベッヒェラーレンでは、古代ゲルマン的な色彩の強いドーナウ河渡河の場面とは全く対照的に、宮廷的な雰囲気が漂っているが、ここでもハゲネは重要な役割を果たしている。ハゲネは、すなわち、リュエデゲールの娘との婚約をギーゼルヘルに勧めたり(1678)、リュエデゲールの今は亡き息子ヌオドックの楯を引出物として要求したり(1968)して、のちの悲劇性を高めているとも言えるのである。

11) M. W. ARMSTRONG: a. a. O., S. 158-159.

リエムヒルトは自ら挑発されている者でもあり<sup>12)</sup>、両者の間はずますます険悪化してゆくばかりである。ハゲネはそれ以後も王冠を戴着近づいてくるクリエムヒルトに、立ち上がって礼を行なわない(1781-1782)ばかりか、さらにはかつてジーフリトの所有であった輝く名剣バルムンクを膝の上に横たえたままにしておくことによって、クリエムヒルトの復讐心を煽<sup>おほ</sup>ってもいるのである。なぜジーフリトを殺害したのか(1789)という質問に対しても、ハゲネは堂々としてこう答える。

Er sprach: «waz sol des mêre?      der rede ist nu genuoc.  
ich binz aber Hagene,      der Sifriden sluoc,  
den helt zu sinen handen.      wie sêre er des engalt,  
daz diu vrouwe Kriemhilt      die schoenen Prünhilden schalt! (1790)

Ez ist et âne lougen,      küneginne rîch,  
ich hân es alles schulde,      des schaden schedefîch.  
nu rechez, swer der welle,      ez sî wîp oder man.  
ich enwolde danne liegen,      ich hân iu leides vil getân.» (1791)

ハゲネが答えた、「これ以上の問答はご無用、こんな話はもう沢山だ。手だれの勇士ジーフリトを討ったのは、いかにもハゲネです。クリエムヒルト様から加えられた美しいプリュンヒルト様の恥を、見事に晴らしたわけですね。

身分の高いお妃様、隠し立てはいたしません。あなたの手ひどい痛手はみんな私のしたことです。男でも女でも、復讐をしようと思うものはするがよい。私は嘘つきにならぬ以上、あなたに数々の苦難を加えた由を申し立てるほかありません。」

ハゲネは前編とは対照的にもはや隠し立てはしないのである。それどころか反対に、ジーフリト暗殺行為の理由づけとしてプリュンヒルトの恥辱を指摘することによって、クリエムヒルトを責め立ててもいるのである。クリエムヒルトとのこれら全ての口論においてはハゲネが常に攻撃される者であるが、しかし同時にハゲネは攻撃の女性に勝ち誇っている者でもある<sup>13)</sup>のである。若い時分からハゲネのことを知っているフン族の武士も語っているように、ハゲネは今や「知慧(ze wîzen)もまさり、<sup>どうもう</sup>獐猛な男(ein grimme man)」(1798, 3)なのであり<sup>14)</sup>、いかなることにも決してたじろぐことのない剛勇の武士なのである。

12) M. W. ARMSTRONG: a. a. O., S. 160.

13) M. W. ARMSTRONG: a. a. O., S. 162.

14) 詩人によってハゲネの形容詞としてたびたび用いられているこの grimme (獐猛な) という語は、「地下」とか「悪魔」の意味を含んでいると言われている。ハゲネの不屈の精神はまさに暗い悪魔の力であるということを詩人はこの語でもって常に意識していたのであろう。(Vgl. G. WEBER: a. a. O., S. 57. u. auch S. 239-241.)

このような最強の者としてのハゲネを最も印象的にきわだたせているのはもちろん最終場面である。ハゲネはなるほど最後にはディエトリーヒの手で縛められてクリエムヒルトの前に突き出されるが、しかし、捕えられても彼は巧みな弁舌でもってクリエムヒルトには負けてはいないのである。クリエムヒルトから「もしおん身が先に私から奪ったものをまた返すつもりなら、命を助けてブルゴントの国元へかえしてとらせよう」(2367, 3-4)という言葉をかけられても、ハゲネは反抗の態度を見せてこう言うのである。

Dô sprach der grimme Hagene:      «diu rede ist gar verlorn,  
vil edeliu küneginne.      jâ hân ich des gesworn,  
daz ich den hort iht zeige,      die wîle daz si leben  
deheiner mîner herren,      sô sol ich in niemene geben.» (2368)

猛々しいハゲネがいった、「そのようなお言葉は何の役にも立ち申さぬ、  
貴いお妃様。わしは、わが主君がたがお一人でもご存生の間は、  
宝のありかを言わぬと誓ったのでござる。  
それゆえわしは何びとにも宝は差しあげられぬのだ。」

宝は今や勝利の象徴であり、ハゲネは決して宝のありかを口にはしない。「では決着をつけよう」と言って、直ちに実兄グンテルの首を打ち落とさせた(2369)クリエムヒルトに向かって、ハゲネは最後の言葉としてこう言う。

«du hâst iz nâch dînem willen      z'einem ende brâht,  
und ist ouch rehte ergangen,      als ich mir hête gedâht. (2370, 3-4)

Nu ist von Burgonden      der edel künec tôt,  
Gîselher der junge      unde ouch her Gêrnôt.  
den schaz den weiz nu niemen      wan got unde mîn:  
der sol dich, vâlandinne,      immer wol verholn sîn.» (2371)

「あなたは思いのままに決着をおつけなされた。  
それはまたわしの考えたとおりの成行きであったのだ。」

今はブルゴントの気高い国王をはじめ、  
若君ギーゼルヘルにゲールノート様もお果てなされた。  
宝のありかを知るものは、神とこのわしのほかは一人としてござらぬ。  
鬼女よ、あなたには宝は永久に隠されたままに相成り申そう。」

死を覚悟したこのハゲネの最後の言葉こそ、ハゲネの最高の強さを示していると言えよう。ハゲネはこの反抗的な言葉によってその場でクリエムヒルトから頭を打ち落とされるのであるが、殺害されても彼は勝者である。ニーベルンゲンの財宝のありかを明かさぬままじろぐことなく滅びていったハゲネは、巖のように揺がぬ英雄として不屈の精神を絶対化する中で強く生きたと言

えるからである。「ニーベルンゲンの歌」におけるこのようなハゲネの不屈の精神は、「古エッダ」や「ヴォルスンガ・サガ」において生きながら心臓をえぐりとられても笑って涙ひとつ流さなかったヘグニの英雄精神——しかもそのえぐりとられた心臓は皿の上に置かれてもほとんど震えなかったというヘグニの不屈の精神を彷彿とさせる<sup>15)</sup>が、この作品の後編におけるハゲネこそまさに古代ゲルマンの真の英雄であったと言ってもよいであろう。彼はこの不屈の精神で後編のあらすじの進行を決定する人物なのであり、従ってニーベルンゲン悲劇全体のあらすじそのものを支配している人物であると言えるのである。「ニーベルンゲンの歌」における悲劇の構図はこうして前編では不実なハゲネによって、また後編では英雄ハゲネによって描かれていると言っても過言ではないのである。

### 結 び

以上のように見てくると、このトロネゲのハゲネは「ニーベルンゲンの歌」においては前編と後編とで著しいコントラストを成していることが明らかである。前編ではグンテル王の進言者に過ぎない人物から次第にグンテル王を唆しジーフリトを殺害する陰謀家へと変身してゆくのに対して、後編ではクリエムヒルトの再婚に反対する警告者から逆にクリエムヒルトの挑発に反抗し自ら破滅へと突進してゆく攻撃的な武将となるからである。前編のハゲネが次第に不実な策略家へと堕ちていっているならば、後編のハゲネは堂々たる英雄へと高められているとも言えるのである。このようなハゲネのコントラスト的二重像は、二つの素材を一つに組み合わせることで統一させた結果に基づくものである。ニーベルンゲンの詩人はクリエムヒルトを自分の叙事詩の中心に置くことによってジーフリト伝説とブルゴント伝説とを一つに結び合わせることに成功したのであるが、クリエムヒルトが中心人物となることによってその敵対者が必要となったのである<sup>16)</sup>。それがトロネゲのハゲネであり、このハゲネとクリエムヒルトとの敵対関係こそが作品全体に統一性を与えている<sup>17)</sup>と言えるであろう。

このハゲネとクリエムヒルトとの敵対関係は、しかし、前編においては根本的にはジーフリトとハゲネとの宿命的な対立である。ハゲネが物語の最初からすでにジーフリトの敵対者として位置づけられていたことは、ジーフリトがニーベルンゲンの国を出るとき彼の父がハゲネについて語った言葉(54)からもすでに明らかであり、ハゲネが到着の勇士ジーフリトについてニーベルンゲン財宝と不死身の肌のことを語ったのも決して古い伝説の「残物」ではないのである。ハゲネはこの財宝の強奪を企んで、さまざまな策略を弄してゆくのであり、ジーフリト暗殺の悲劇はまさにこの財宝に目をつけているハゲネの企みによって展開されているのである。このように

15) 谷口幸男訳：エッダ177-178頁、菅原邦城訳・解説：ゲルマン北欧の英雄伝説129-130頁、並びに谷口幸男訳：アイスランドサガ593-594頁。

16) M. W. ARMSTRONG: a. a. O., S. 146.

17) M. W. ARMSTRONG: a. a. O., S. 147.

ジーフリトとハゲネとの対立は財宝をめぐる展開しており、まさにニーベルンゲン財宝に由来する権力のモチーフは前編の本質的なところで保存されたままであると言えるのである。

ジーフリトとハゲネとのこの宿命的な対立は、後編ではクリエムヒルトとハゲネとの対立に取って代わる。後編でクリエムヒルトの再婚と招待に反対するハゲネの執拗な警告も、結局のところ、ジーフリトがクリエムヒルトに遺した財宝に基づいており、この意味においてクリエムヒルトはジーフリトの後継者でもあるのである。フン族の国でのハゲネとクリエムヒルトとの対決も、本質的なところでは財宝をめぐる争いにほかならない。最後に財宝を自由にすることができる者が勝利を取めたことになるのであり、財宝は今や二人の宿敵にとってはまさに「勝利の呪物」<sup>18)</sup>なのである。ニーベルンゲン財宝に由来するこの権力のモチーフは後編でも本質的なところで保存されたままであることがうなづけよう。

ニーベルンゲンの財宝に基づく権力のモチーフは、このように「ニーベルンゲンの歌」全体を貫き、作品の核心にあるとも言えるのであるが、しかし、この財宝はクリエムヒルトにとってはハゲネとは別のもう一つの意味を持っていたことを指摘しておかなければならない。財宝はクリエムヒルトにとっては副次的なものであり、彼女がそれを欲しがったのも実はその財宝がジーフリトの後朝の贈物であり、従ってジーフリトの象徴であったからなのである。最終場面でクリエムヒルトがハゲネに向かって言った「もしおん身が先に私から奪ったものを返すつもりなら、命を助けてブルゴントの国元へかえしてとらせよう」(2367, 2-3)という言葉も、確かに表面的にはハゲネに強奪された宝のことを言っているのであるが、しかし、その心の内ではジーフリトの死のことをほのめかしているとも言える<sup>19)</sup>のである。ハゲネが宝を返せば、ハゲネの不正、ハゲネの罪の告白となり、夫殺害によって苦しみを受けたクリエムヒルトが彼に象徴的に勝ったことになる。しかし、クリエムヒルトは、ハゲネの言葉(2368, 1-3)に唆されて、実兄グンテルの首をはねさせるが、これはハゲネの思い通りのことであつたのである。ハゲネはハゲネで決してクリエムヒルトに弱みを見せはしないのである。それではハゲネは償いをしないことになると悟ったクリエムヒルトは、

«sô wil ich doch behalten daz Sifrides swert.  
daz truoc mîn holder vriedel, dô ich in jungest sach,  
an dem mir herzeleide von iuwern schulden geschach.» (2372, 2-4)

「それならばせめてジーフリト殿の剣を貰っておきましょう。  
これは私がいとしい人の見納めの日に、あの人の携えたもの。  
私の心痛はおん身のために生じたものです。」

と言って、名剣バルムンクを鞘から抜き取って、ハゲネの頭を打ち落としたのであるが、この言

18) M. W. ARMSTRONG: a. a. O., S. 164.

19) Werner SCHRÖDER: Die Tragödie Kriemhiltis im Nibelungenlied. ZfdA. 90, 1960/61. S. 154.

葉がクリエムヒルトの最後の言葉となったのも決して意味のないことではない。クリエムヒルトの復讐は、いとしい夫ジーフリトの死による「心の悲しみ」(herzeleide)<sup>20)</sup>から成されたのであり、夫への変わらぬ愛のあかしでもあると言えよう。この作品にハゲネが「権力」のモチーフをなおも保持する役割を果たしているならば、クリエムヒルトは「愛」のモチーフを新しく取り入れる役割を果たしているのであり、この二つのモチーフが全体にわたって見事に融合しつつ悲劇が展開しているところにこの作品の特質があると言えるのである。(1988・9・10)

\*本稿執筆にあたってテキストは》Helmut de BOOR (Hrsg.): Das Nibelungenlied. 20. Auflage F. A. Brockhaus Wiesbaden 1972《を用い、テキストから邦語で引用・説明している部分については相良守峯訳(岩波文庫)を使用させていただき、また都合により若干変えさせていただいたところもあることを最後に付記しておきたい。

---

20) クリエルヒルトの leit に関しては拙稿:「ニーベルンゲンの歌」と「哀歌」における leit の研究 徳島大学教養部紀要(人文・社会科学)第16巻1981年を参照のこと。